

「東北文学旅行」点描

北村 博

「東北は陸の奥、蝦夷の国」と高校時代担任の先生からズーゾー弁で聞かされ、出発実際に東北大で学んだ知人から、武家数跡の点在する森の都仙台の情緒を吹き込まれ、閉鎖的な京都人には異境である鄙びた東北を想像する浪漫的心情を嫌悪しながら仙台を振り出しに文学旅行に参加した。

青葉城址の政宗像が俯瞰する仙台のはずれ、埃にまみれた細い道の右手に「伽羅先代萩」の政岡の墓を見ながら、バスガイドさえ見逃がすほど、人々の記憶から忘れられた小さな寺大林寺に土井晩翠の遺跡を訪ね、総合グラウンドに変貌しておもかげを偲ぶべくもない宮城野をあとに塩釜街道に出た。「荒城の月」のメロディに広瀬河畔に宿つた藤村や啄木を脳裏に描きつゝ、眼前にうつた末の松山は、仙台平野に黒々と美しい線を見せて浮びがあり、菜食主義的な旅情を感得させた。松島湾を俯瞰する塩釜神社を背にした漁港、塩釜の宿は鮮魚の水揚げ全国第一を誇る魚市場を近くにひかえ、漂う磯の香は団体旅行を

すれば必ずおこるいらだちしい個人的感情をよりかきたてた。文学旅行六回目にして初参加の理由の一半もこんなところにあつたのかも知れない。

朝もやの晴れきらない松島湾を遊覧船で巡り、瑞巖寺、観欄亭を訪れ、右に雄島左に五太堂、そして点在する浸蝕された奇型の島々は、「松島扶桑第一の好風にして」と絶賞されたのにふさわしい眺めと云えるだろうが、観光化されすぎた教材的意味以上の感慨はおこらなかつた。しかし、平泉はさすがに奥州の京都、藤原四代が築いた繁栄、その趣は中尊寺を中心とした森林のたゞずまいにあつた。今もなお藤原三代の遺体を包蔵し、七宝螺鈿、金環、菩薩の光堂、経堂に当時を偲ばせ、山麓を流れる北上川、衣川は義経伝説を伝えながら、ゆるやかに流れていた。

菜食主義者宮沢賢治が「羅須地人協会」を設立し、荒地を耕し、稲作を指導しながら「雨ニモマケズ」以下の詩を作り、童話を書いた花巻の地は、東北的な趣が保存され、旅情を満してくれる。賢治達は、幼い時北上川の白亜紀泥岩に彼らの影を投影し、海の渚であつたことを推定し、そこをイギリス海岸と名付けたという。川岸を吹く風は白い花の花

四八

びらをなびかせ、一瞬涼しさを感じさせた。花巻から盛岡へ、賢治から啄木へ、とび石の旅も終りに近く、「克く見ると実に親しむべき愛嬌のある顔だ」といつては啄木が、頭を擲り、撫でた天満宮の狛犬に挨拶し、城下町特有の街角をぐる／＼廻り、不来方城址から浜民へ。「やはらかに」と愛唱した歌の碑のすぐ側を北上川が流れていた。北上川をたどつた旅行の終焉に一人旅が待つていた。

○ 会員消息

村田 穆 十月十六日、京都府乙訓郡長岡町

大字調子小字大縄七十一

長岡団地住宅 32号へ転居

森本 茂 十月十二日同右 31号へ転居

林美津子 今井氏と結婚、新居は大府豊中市螢ヶ池北町一ノ六六角谷アパート

ト

田中実子 十月十二日、八田氏と結婚、住所は従来通り

田辺 匡 十一月三日、中村和子さんと結婚

反橋三郎 七月より大阪市北区樋ノ上町精研

工業KKへ就職、住所は従来通り